

バスが 来ましたよ

由美村 嬉々 文

松本 春野 絵

AliceKana

ここは、みかんや梅^{うめ}がおいしい、ある南^{みなみ}の町^{まち}。

わたしは、目が見えません。

若いときに目の病気になってしまったのです。

Alice Kan

だんだんと目が見えなくなっていき、

10年後には、まったく見えなくなってしまいました。

それでも、仕事をつづける決心をしました。

2年間は、家族につきそってもらって
仕事場である市役所に通い、
その後1年、仕事をやすんで、
白杖をもって歩く練習をしました。

なにも見えないなか、
杖で前をたしかめながら、
一歩ずつ一歩ずつ、すすみます。

AliceKan

そしてこの日から、
ひとりでバスにのり、通うことにしたのです。



ある暑い夏の日の朝、月曜日。
「もう、ひとりで歩ける、だいじょうぶ」と
自分をはげましながら、
わたしはバス停に立っていました。

バスにのって、5つさきの「市役所前」までいく、
たったそれだけのことです。
でも、バスが来たことがわかるのか、
ひとりで、のりおりができるのか……。
ほんとうは不安でいっぱいでした。





Alice Kan

ようやくバスにのりこんだときには、
ひやあせをかいていました。

それから毎朝、バス停に立ってバスを待ちましたが、
集中して耳をすましていないと、バスが来たことに気づかずに、
のりそびれてしまったこともありました。

バスにのってからも、ずっと右手で白杖を、
左手でつりかわをにぎりしめていました。



Alice kan

そんなある朝。

「おはようございます」

小さなかわいい声が聞こえてきました。

「バスが来ましたよ」